

『王家に生まれて』第3章（後半）

リチャード・ハフ 作
茅原道昭 訳

第三章 戦時下のウィンザー家（後半）

6

バーティーの戦いには二種類あり、大半は意気消沈させる性質のものであったが、ついに……。ああ、あの偉大なる戦いの記憶よ！ それは彼の生涯に残るものであり、落胆した折々や、彼の脆い自信がゆらいだ時、思い起こされるであろう。

1
しかし一九十四年八月の早い時期には、デヴィッドが自分は危険から免れているという不満でいらいらしている一方で、バーティーは何千という水夫たちとともに、父の大英帝国を護つてい

るといふ誇りと満足を分かち合っていた。英国陸軍はフランス、ドイツ、オーストリア、そしてロシアの陸軍とは対照的に貧弱であるが、交易と沿岸の安全を確保する海軍は、世界で最も大規模であった。一九十四年には「ブリタニアは海の支配者」が愛国的歌謡以上のもになっていた。

そして今やドイツが、強大な軍事力によって十年そこそこのうちに造られた、近代的で、強力で、断固とした海軍によりこの支配を脅かしていた。ドイツ軍は半世紀ほど前にフランスを打ち破っていたが、再び同様のことをしようともくろんでいた。

スコットランドの北、スキヤパ・フロウに停泊した初めての日の夕暮れ、バーティーは、彼の担当の旋回砲塔にいる将校で、デヴィッドと彼の友人でもあるキャンベル・テイト大尉とともに船

橋へと歩いて行った。その光景は心に訴えかけ、安心させるものであった。長い列になって停泊してある、大艦隊のドレッドノート型軍艦が力強さと不屈の精神を表わしていた。

コリングウッド号に最も近いところにある戦艦の一つにテメレルがあった。それは、イギリスの戦艦や巡洋戦艦に特徴的な二組の三本型マストと、コリングウッドと同様に、六台の装甲旋回砲塔に十機の十二インチ型の大砲を搭載した、頑丈な二本の煙突のついているドレッドノートであった。「私は、それが初めて就役した時に乗り込んでおりました。それもまたとても素晴らしい戦艦です」とテイトが言った。

「君はヘンリー・ニューボルト卿の『戦うテメレル』を読んだことがあるかい？」とバーティーが尋ねた。「それは私の先生が、私に空で暗記させ、私が本当に楽しんだ数少ない詩の中の一つなんだ。素晴らしい詩人だ、ニューボルトは」そして彼の人生で初めて、そしておそらく最後であろうが、バーティーはその場面にふさわしい詩句を引用したのであった。

今や入日の風は震え、

船は川を下り、かすみゆく。

されど英国はとこしえに歌う、

それは戦うテメレルと。

「戦うまであまり待たなくてすむように期待しましょう」テイト大尉はまじめな顔で言った。

その時ジェイムズ・リー大佐が船橋に現われ、テイトとバーティーは気を付けの姿勢をし、彼に敬礼した。

「戦争の最初の晩にすてきな夕べだね」と大佐が言った。「そして君たちの気持ちも称賛しよう。その詩もまた、殿下」そうして彼は笑った。

「ヘンリー・ニューボルト卿の詩です、大佐。私の詩ではありません」とバーティーは打ち明けた。

大佐は監視士官のところまでぶらぶら歩いて行き、二言三言言葉を交わして、戻って来た。「戦闘状況については知らないが、すでに一つ驚くべきことがあった。明日の朝公式に知らされるだろうが、今知ったところで問題もなからう。我々は司令長官を失ったのだ」

「キャラハン提督でございますか……、大佐？」

リー大佐が答えて、「退任させられたのだ。ジョン・ジェリコー卿が追って就任なさるだろう。そして我々に新しい名前がついた。『グラント・フリート』（大艦隊）だ。正直に言って、途中で計画を変えろという考えは好きではないね。しかしその名前は気に入った。どうだろうか？」

上級士官室での夕食が終わると、他の将校たちがコリングウッドの船橋に集まって来た。ホレース・ワトスン中佐、マクスエ

ル・ネイピア大尉とホレース・ハーバート大尉、パーティーの母親付きの女官、エアリー夫人の息子であり、彼の親友であるブルース・オーグルヴィ士官候補生たちである。そして会話はみんなに共通するものになった。キャラハン提督はひどく惜しまれることだろうというのがみんなの意見であった。艦隊は司令長官としての彼に慣れ親しんでいた。そしてジェリコー提督の名前と評判は広く知れわたっているとしても、この交替がこのような重大な時に行なわれたことは奇妙に思われた。しかしある話題については全員の意見の一致があり、パーティーは誇り高く、得意になった。ジョージ国王が艦隊に、彼ら全員の安全を祈る旨の電報を送り、全員がそれに感じ入ったからである。

我々英国民の歴史におけるこの重要な時に、私は君（すなわちジョン・ジェリコー卿）と、そして君を通し、君が指揮をとることになる艦隊の将校や水兵に、君の統率下で彼らが英国海軍の歴史ある栄光を蘇らせ、一新させてくれること、そして再びこの試練の時に英国本土と帝国全体の確かな盾となることと私が確信をもっていることを知らせるものである。

パーティーは、二番手の監視、つまり真夜中から午前四時までの監視に当たっていたので、床に入るために間もなく船橋を離れた。そして同じ時間に、歓声と拍手とともに寝た姉とは対照的に、彼

が聞いたのは、停泊している軍艦のきしみと唸り、そしてカモメの時々鳴く声だけであった。

グラランド・フリートの水夫すべては戦争のために訓練を受けていたけれども、突然攻撃され易い立場になったという感覚、彼らの船が今や標的となっているという意識、彼らの生命を奪うのが敵の意図するところであるという意識は今までにない気持ちであった。それは、どんな機動演習も、平時におけるどれほどの訓練もまったく気構えさせることのできない状態であった。これらの水夫たちの多くは、心の中で、怒りと、最初に敵を攻撃するという決意の入り交じった、恐怖の刺すような痛みを感じていた。

今は援助し合う僚友関係や規律が最も重要となる時期であり、グラランド・フリートが出航した時、それが示された。まるでスキャパ・フロウが突然活火山になったかのように、黒煙の大きな垂れ幕の下を、偵察用巡洋艦に先導され、高速駆逐艦の小艦隊に付き添われて、軍艦の分隊が次から次へと出て行った。パーティーは監視に当たってはいなかったが、他の者たちと同じように、デッキに立って、艦隊の感動的な姿が、ホクサ・ヘッドとフロッタの間の狭いホクサ・サウンド海峡を通り抜けて、東にある北海の灰色の海原へと入るのを見つめていた。パーティーは、彼の人生においてかつてこれほど興奮し、気持ちが良い、充実したことはなかったと心に思った。

このグラランド・フリートの目の届く範囲において敵艦の攻撃は

なく、彼らは八月七日、スキヤバ・フロウに帰還した。ドイツ軍の艦隊は、英国海軍に挑戦を望む気配をまったく見せず、機雷敷設艦とユーボートを送り出して来ただけで、そのうちの一隻は、八月九日に巡洋艦バーミンガムに攻撃され、沈められた。

二週間後バーティの個人的な戦い、彼の短い人生において繰り返し勢いを吹き返す病気との戦いが再び始まった。重苦しい気持ちで、彼は八月二十三日の日記を書いた。

昼食後、午後の監視を勤める。その時激しい腹痛があり、病室に行った。ほとんど呼吸ができないほどである。そこに温湿布をしてもらい、楽になった。腕にはモルヒネを注射してもらった。八時に中佐の船室に寝かされ、一晚中眠った。

今度は彼の持病である胃痛ではなく、安心したことに、盲腸炎であった。とはいっても、救急船、そしてアバディーンの医療施設への移動が必要であった。ここでバーティは手術を待つて、横になっていたが、その時ジュリコーとグラント・フリートの一部は再びスキヤバ・フロウを出航し、海戦による初めての戦闘が行なわれたヘルゴランド湾を目指して、北海を進んでいた。バーティは、手術を待ちながら、新聞でドイツ軍の三隻の巡洋艦と二隻の駆逐艦が沈められたというイギリスの勝利を読んだ。コリングウッドは実際には戦闘に参加していなかったが、どんなに彼

はそこにいればと望んだことであろう。

バーティは、アバディーン大学の教授であり、スコットランドの王室付きの外科医であるジョン・マーンロック氏の執刀により、九月九日に手術を受けた。それほどの痛みもなく、経過は良好であり、バーティは、回復後、艦に復帰できると心待ちにしていた。その間、メアリーとドユソー先生の見舞いがあり、別の日はデヴィッドとミダーが、彼に会うため十一時に到着したが、二人とも彼が元氣そうであると思った。

主にヨーク邸で過ごした、非常に慎重な療養にもかかわらず、バーティの回復は遅々とし、ぶり返しや突然の胃痛の再発にも悩まされた。一九十四年のその秋、デヴィッドはついに思いをとり、フィンチとともにフランスに行ったが、その間ずっとバーティは艦から離れ、戦争に参加できず、我が身の病気を嘆いていた。多くの知った名前のある重傷者名簿や、アントワープでイス・グレッグが捕虜になったことが彼の落胆ぶりをいや増した。国王付きの外科医、フレデリック・トリールヴス卿は、バーティは断じて二度と航海に出るはならないと心の中で考えていた。バーティには知らせない方がよからう。それは彼の気持ちを一層重くするだけだ。しかし十一月の半ばまでにバーティは体力的にずっと良くなり、そのことが、デヴィッドがフランスに行くために行なったのと同じぐらい集中的に、大人であることの

象徴と人生の目的である彼の艦に復帰する運動を始めるきっかけとなった。

バーティーは、トリーヴスと父親に、自分がどんなに調子がいいかを述べ、実際はその正反対なのだが、彼が禁固刑と見做しているものからの解放を望んでいるという手紙を書き送った。結局、医師は、彼が陸上勤務の兵役に復帰することなら許可するであろうこと、そしてもし彼が二度と発作に襲われないのであれば、ある程度の期間の後、彼が自分の戦艦に復帰できるであろうということ、父からの手紙で知らされた。

陸上勤務は、彼が希望するうちでも最も興味深いものであり、有り難いことに再び軍服姿で、バーティーは、一九一四年十二月二日、海軍本部の司令室に出頭した。彼の仕事は、イギリスの主要な軍艦のそれぞれの位置と、わかる範囲での敵軍のその位置が、一目でそれとわかる大きな壁の海図に日付を入れるのを怠らないことであった。現在の仕事場にいることはわくわくするような時間である。英国海軍は、チリ沖で屈辱的敗北を喫したが、その時はドイツ軍の小艦隊が、それを捜索していたより弱小なイギリスの巡洋艦隊を破壊しただけなのであった。反撃が行なわれつつあり、ドイツ戦艦の後を追ひ、破壊する行為は、グラランド・フリートの三隻の巡洋戦艦を含め、数多くの軍艦を移動することを必要とした。

南大西洋でのイギリス軍の偉大な勝利のニュースが海軍本部に

届いた時、ジョージ国王はサンドリングラムに滞在していた。イギリス軍の巡洋艦隊を沈めた、ドイツ軍の二隻の巨大な装甲巡洋艦は、ドイツ海軍提督とともに、フォークランド諸島南方で海底に沈没し、その三隻の小型巡洋艦のうち二隻もまた沈められた。バーティーはこの勝利を喜び、そのニュースがまだ早い時期で、秘密裡になっている段階において、十二月十日、父に宛て、メッセージを書き送った。

海軍本部から帰って来たところですが、ニュールンベルク号が、カンバーランド号クラスのケント号によって沈められたと聞きました。わずかな者だけがこのことを知っているだけです。明日の新聞にそれが出るかどうか分からない以上、どなたにもおっしゃらないでください。父上がそのことを知りたがっていると思いましたが、最初にお伝えできてうれしく思っています。

しかしバーティーがこのニュースを最初に知らせたわけではなかった。ウィンストン・チャーチルが何時間か先に、個人的にメッセージを送っていたのであった。ジョージ国王は、息子にその「内部の」ニュースを吹聴する喜びを許す意志はまったくなく、バーティーの公認伝記作者によると、彼に「頭ごなしに」そのことを伝えたそうである。

バーティーの父が、グランド・フリートに乗船し、心から祖国のために、自分の命を捨てる覚悟をしている息子、勇敢な、生まれ変わったバーティーを、いかに自慢しているか口にしていたのは、ほんの数週間前のことであった。今や、この十九才のひ弱な若者に対してほとんど不面目を感じ、軽蔑を抱いていたかつての態度に父親が逆もどりし、母も同じ気持ちであることは急速に明らかとなった。

それとは対照的に、バーティーの両親に対する愛情と尊敬は決して衰えることはなかった。彼は初めて彼らの十分な敬意を受けたいことをとても自慢に思っていた。そして彼は今まで以上にそれを回復することを堅く心に決めたのであった。その気持ちがいかに強かったかが、彼の後半生ではつきりとする。その時は、彼が再び海上での従軍を許してもらうため、彼の事情を強く訴える、絶え間のない手紙や言伝によってしかそれが表現されなかった。

一九一五年二月三日、バーティーが司令部で勤務についていると、バットンバークから海軍大臣を引き継いだ、いかめしい「ジャッキー」・フィッシャーがウィンストン・チャーチルとともに入って来て、一緒に海図を眺めていた。彼らはドイツ軍の巡洋戦艦の状態について話し合っていた。それは、ヘルゴランドにおける、ピーティ提督の巡洋戦艦との長い海戦で打撃を受けていたのだった。「敵は昼夜働いて、デルフフリンガーとザイトリッツを修理しておるぞ、ジャッキー。ドイツから知らせがあったのだ。

近いうちにもう一度彼らと会戦する準備をしなければならん」とチャーチルが話していた。

バーティーは、海戦の指揮をしている二人の国民的英雄のそばに、いることに感激し、仕事に戻るように命じられるまで、仲間の士官たちと気を付けの姿勢で立っていた。最初にバーティーに気がついたのはチャーチルの方であり、同時に彼が艦に乗船していないことでの気遣いを表わした。「コリングウッド号にお乗りかと存じました、殿下」と微かではあるが、特徴的なもつれる口調で言った。

「そうだったのですが、盲腸を切ったのです。もうすっかり元気ですが、復帰するのは難しいようです」

チャーチルは秘書に何かつぶやき、そしてバーティーに言った。「できることを考えてみましょう。国王はあなたが船上にいらっしやることを望んでおいでだと思います。……できるならご自身がそうなさりたいのでしようけれど。きつと殿下のご乗船をお望みのはずです」

翌日バーティーは副海軍大臣の執務室に召喚され、翌週、プリマスでコリングウッド号に乗船するようにと命じられた。その晩彼は喜び勇んで日記にこう記した。「海軍本部に行くのは今日が最後となった」

一九一五年三月の下旬に、バーティーは生まれて初めて充実感と

強い目的意識を味わった。今や彼は上級海軍士官候補生であり、海上の警備には立たなかつた。それどころか、夜間は探照灯を操作し、昼間は潜水艦の監視における責任者となつていた。港内にいる時は、銃砲や魚雷担当大尉たちの補佐として働き、蒸気小艇と警備艇を指揮した。彼はまだラグビーやホッケーのような荒々しいスポーツをすることを許されていなかったが、将校たちのために整備されたコースでゴルフをすることができた。

ドイツ軍のユーボートは艦隊にとつて目の話せない存在となつたが、折しもそれらが商船に危険を及ぼし始めた。その中には定期船ルシタニア号もあり、乗船者の多くが女性と子供で、中立国アメリカの百二十八名を含む、およそ千二百名の乗客とともに沈んでしまった。「多くの生命を失つた恐ろしい災難」であるとバーティーは怒り心頭に発し記した。「このようなことが起こつた後で、復讐のために何もできないと思うとたいへんに腹がたつた。このことでは我々は常に万全の心構えができているが、待つことが必要だ」

何ヶ月も戦闘のない状態で、グラランド・フリートの何千という部下の精神を高めておくことは、ジェリコー提督とビーティ提督、そして艦の司令長官たちの最も困難で、重要な任務の一つであった。しかしそのことは、バーティーの手紙や日記に明らかかなように、見事に成功した。その上、彼は健康状態の回復に大いに喜んでゐた。「ここに戻つてからすこぶる調子がいいんだ」と彼はハ

ンスルに書き送つた。

残念なことに、バーティーは一九一五年五月五日から一時的に、日記をつけるのを中断している。だが重苦しい気持ちで、彼が持病の胃痛が再発したことに気がついたのは、この月のある日であった。頻繁に激しい胃痛が続いた後、彼は避けられぬこととして屈伏せざるを得なかつた。それから再び半病人のような時期があり、それは虚弱体質になると同時に、彼にいつも羞恥心を抱かせた。

ついに彼は「軽微な任務」をしに、海軍本部に戻り、それから三カ月の病氣休暇があつた。そして突然に、また有り難いことに、医療検査や、「治療」の講義といった退屈で、気の重くなるような日課が終わりを告げた。戦争と個人的な悩みという暗闇に射す、突然の陽射しのように、フランスにいるデヴィッドから手紙が届いた。つまるところ、こつちに来て、会わないか、とそれには書いてあつた。「お父様が電報で、大丈夫だと言つて来たんだ。しばらくぶりにお前に会えるなんてうれしいよ」

一九一六年の冬の最中、一月二十四日にバーティーは、ラ・ゴルの近衛連隊の司令部に車で到着した。デヴィッドのテントという人目につかないところで、それぞれカーキ色とネーヴィー・ブルーの軍服を着た二人の若者は互いに抱き合った。

「調子はどうだい、バーティー？ お前がひどい病氣になつた

とお父様が言っているが、僕にはそれほど悪いようには見えないぞ」

彼らはたばこを交換し合って、デヴィッドは一人用の折りたたみ椅子に、バーティーはベッドに腰を降ろした。

「とてもいいんだ。艦に乗船できるほど素晴らしいよ。でも何か起こったらいけないということで、医者がそうさせることを嫌がっているんだ。彼らが責任をとらされるからね。たとえコリングウッド号が爆発したとしても、自分たちが僕の死に責任があると思われると彼らは考えている。とはいっても、かまうものか。こんなふうな大事にされているよりも立派な死に方をしたいね」

「そうだともし」デヴィッドは優しく言った。「何年も前に、ミダーが僕たちをロンドン塔に連れて行ってくれた時、彼がドクター・ジョンソンを引用していたのを憶えているかい？ ここに来て、よくそのことを思い出すんだ。『兵士にならなかったこと、もしくは水夫にならなかったことで、自分自身を遺憾に思わぬ者はいない』」

「でも兵士や水夫になって、危険から逃げ回っている方がもっと悪いさ。お父様は僕たちが最前線にいたいことを望んでいると思うんだ」バーティーは弁護するようにつけ加えた。「でもこういった医者や助言者に囲まれては……」

「それからキッチナーがいる」デヴィッドはその名前を強意語のように使って、口をはさんだ。「でもお父様は、もしそうした

ければその反対意見を屈服できるのに。ご自身を普通の人と考えているし、お母様はお父様に文句ばかり言っている」

バーティーは、兄の両親に対する厳しさと尊敬のなさにショックを受けたが、反論はしなかった。何よりも彼はこの訪問を成功させたかったのだ。

そしてそのようになった。翌朝バーティーは、召使い仲間には「おじいさん」として知られているフィンチに挨拶したが、彼の見慣れた顔と落ち着いた態度にバーティーは相変わずほっとするのであった。その後、キャヴァン將軍が、デヴィッドの副官だけを連れ、デヴィッドの車に乗って、彼らだけで外出することを許可し、彼らに午前中すくにも敵陣を砲撃することを警告した。

爆撃による穴ぼこや破壊された建物の残骸の山を避けながら、彼らがわだちのできた、凍った道路を走って行った時、バーティーは驚きながらあたりを見回し、兄に問いかけた。彼は前線の状況について、「イラストレイトレイティッド・ロンドン・ニュース」と「グラフィック」という新聞でつぶさに読み、何百という写真を見ていた。現実は一層ひどいものである。ある村では、教会の一部のみが残っているだけであった。他のすべての建物は残骸に帰っていた。しかしなお、驚くことに、村人たちの何人かは、次の砲撃の危険があるにもかかわらず、仮住居の小屋やテントの中で、その残骸とともにまだ暮らしていた。

「どうして彼らはここにいたことが許されているんだい？」と

彼はデヴィッドに尋ねた。

「彼らは時々出て行ったりするんだ。しかし必ず帰って来る。まったく迷惑なことだよ、可哀想だけれど」

彼らは緩やかな傾斜の頂上に着いたが、そこは東に向かい、ドイツ軍の戦線に面した広い景観、そう言ってよければだが、それを見晴らすことができた。防寒のため、首まで大外套のボタンを留めた兵士の一団が、屠殺場へ向かう家畜のように頭をうなだれて、歩調を合わせそばを進んで行った。

彼らの陸軍中尉が、大型のダイムラーの後ろに立っている将校たちを訝しげに見上げ、突然皇太子に気がついて、敬礼をしたが、同時に彼の伍長に「かしら左！」と号令した。デヴィッドとパーティーは挨拶を返したが、その将校は突然車のところまで引き返して来た。「皇太子陛下、申し訳ありませんが、五分後に後ろにごさいます大砲が発射されることをお伝えしなければなりません」

デヴィッドは彼に礼を言い、運転手に一団の後ろまで走らせるように命令した。「運がよければ、ちょっとした興奮を味わうことができるかもしれない」と彼はパーティーに無邪気な笑顔を浮かべて言った。「遠路はるばるやって来て、ドイツ兵の敵意を見ないことはないさ」

車が、上手に隠された大砲から優に半マイル離れた時、それらが発砲した。海軍銃砲士官として、パーティーは何回も演習「砲

撃」に参加し、何度も十二インチ砲の旋回砲塔に入り、何度となく自分自身で大砲を撃ったことがあった。その上、陸上において、標的に対象物を置き、一度に二百機も使った、まったく違った形態の「砲撃」に参加したこともあった。しかし十八ポンド砲を搭載した六機の砲台が、それぞれ一分間に八発ずつ撃っているその音量と強度に較べられるものは聞いたことがなかった。その反響音はほとんど鼓膜をつんざき、彼らはみんな、五分間の集中砲撃の間、手袋をした手でしっかり耳をおおっていたのだった。その間に彼らのまわりの空気は、頭上を飛び交う砲弾によって疾風のように変わっていた。

デヴィッドの運転手が、敵の反撃を注意しようとしたちようどその時、甲高い音とさらにヒューという音がして、ドイツ軍の砲弾が彼らと砲台の間に落下した。デヴィッドは双眼鏡を取り出して、稜線の上を東へとそれをかざし、敵の大砲の閃光によって位置を見極めようとした。パーティーは望遠鏡で、砲台を見つける飛行機が、炸裂する対空射撃の茶色の煙につつまれているのちらりと見た。すぐにケープルの先に繋がった、ドイツ軍に対する観測気球が素早く空に昇って行き、ぶら下った籠の中に、ドイツ軍の落下する砲弾を見つける二人の勇敢な隊員がいることをパーティーは分かったように思った。

「彼ら是我々のために素晴らしいショーを準備しているのさ」とデヴィッドは、こういった敵の攻撃の事実喜んで言った。そ

の瞬間三発のドイツ軍の曲射砲がすぐそばに落ちたのだが、まるでこの「素晴らしいショー」の観客が見つかったかのように、二発は車の横に、もう一発はわずかだがさらに左に離れたところであつた。悪臭と煙が風に流されながら、地面が振動した。

運転手はこの敵軍の「敵意」の表われに非常に驚き、その間に車から降りて、彼らに手を振っていた。「殿下、避難すべきだと思われませんが」と彼は叫び、デヴィッドの副官は尋ねるようにデヴィッドを見た。

他の大砲も一緒になつて、地面はさらに激しく揺れだし、空気は煙と埃で一杯になつて来た。英国国王の後継者とその弟である二人の若い将校は、しばらく立っていたが、さらに激しくなる大砲の炸裂にまったくなす術がなかった。するとデヴィッドが、今にも彼らを置いて避難しに逃げて行きそうな運転手と副官の葛藤を理解し、車から飛び降りた。「来るんだ、バーティー。我々はお前の名前を明日の死亡者リストに載せたくないからね。お父様がどんなにお怒りになるか考えてごらん」

百ヤード離れたところに使われていない塹壕があり、四人はそれをめがけて走つて行つたが、一発の砲弾が彼らを埃まみれにし、凍った土のかたまりを飛ばした。その一つがバーティーの右頬に当たり、そこに手を当てた時、それが血で汚れていることがわかつた。彼は負傷したのである。

しかしバーティーの「負傷」はかすり傷にすぎず、塹壕という

安全なところから、また古い弾薬箱の上に立つて、彼とデヴィッドはドイツ軍の砲撃を見守り続けた。それは今はもう砲台のちょうど南のある地点に集中しているように思われたが、そこにはいくつかの家々が、すでにひどく爆撃を受けた道路に沿つてまだ立っていた。それと同時に、イギリス軍の大砲が二倍にして応酬し、再び砲撃したが、まるで地獄の門が突然開き、そこに住む亡者たちが反乱の長いわめき声を挙げたかのように、両軍の攻撃と炸裂する砲弾の、圧倒するような不協和音が数分の間起こつた。

立ちこめる煙と埃の間から、バーティーはそのままドイツ軍の爆撃の結果を見ることができた。「いくつかの家がドイツ軍に爆撃されるのを見た」と彼はその晩コリングウッド号の友人に書き送つた。「そして女性と子供たちが裏のドアから逃げていた。我々は、戦争の恐ろしさと、毎日爆撃を受けているこうした人々を考えざるを得ない」

7

四ヶ月後、バーティーは、自分がドイツ軍の砲撃の特別な標的になつてゐることを再び感じた。ダイムラー車の代わりに、今回バーティーは戦艦に乗船して、テイト大尉と、明らかに体重オーバーの小柄な下士官を含む何人かの士官たちとともに、コリングウッド号の最も高い回転砲台の鋼鉄製の床の上で腰かけていた。

一九十六年五月三十一日の夕方、ちょうど六時半のことだが、船上でのこういった内輪のパーティーは、南方から急速に接近していると彼らが聞いている、ドイツ戦闘艦隊の監視をすることもあった。

霧と、黒い煙突の煙を通して未だ何も見えなかったが、その時どこからともなく、二つの敵方の砲弾が飛んできた、というかそのように思われた。それらはおそらく十一インチの重い砲弾であったのだらう。一つは航行する船体の右舷にぶつかり、フォアマストの高さまで水柱を上げたのである。二つ目の砲弾は、彼らの頭上でバンシー（女の精霊）の叫び声のような音を立てて、左舷で爆発し、同じような効果を挙げた。完璧な試し撃ちである。

今回パーティーは、一月にデヴィッドと一緒にいた時よりも素早く、安全を求めた。「私は本当にびっくりした。そして発砲されたウサギのように、回転砲台の上にある穴の中に逃げ込んだ」と後に彼は書いている。彼のすぐ後に小柄な下士官が彼についていこうとした。しかしハッチは彼の胸回りに対してはせますぎて、彼はしつかりとはまってしまったのだが、パーティーと士官候補生たちが力いっぱい彼の足を引っ張り、テイトは彼を上から押し込んだのだった。同時に彼らはさらに二つの敵方の砲弾を聞いていたが、今度はもっと近くであり、とても近いので、外に残っていた砲台の士官は、砲弾の色を見ることができたほどだった。

おそらくこの運の悪い、小柄な士官を救い出すことに成功せし

めたのは、彼にとつてショックとなった効果か、もしくは砲台の士官が適切に押し込んでくれたことによるであろう。いずれにしても、彼の足は下の梯子の一番上の横棧に触れ、体を擦りむいて混乱してはいたが、姿を現して、すぐにパーティーや他の者たちと一緒にになり、落ち着きを取り戻した。テイトはすぐに指揮を取り、パーティーの目を訓練士の望遠鏡に据えさせて、敵の姿を見つめるや否や攻撃を開始する準備をしたのである。

二十四時間前パーティーは憂鬱のどん底にいた。フランスからの帰還以来、彼は、彼の個人的な戦い、つまり自分の船に戻るといふことにかかりきりだった。五月五日という間近になつてやつと彼は勝利し、コリングウッド号に再び乗船する命令を受けたのである。さらにこの歓迎すべき知らせは、彼が海軍中尉というかなりの地位になる任命と同時にあつた。運がやつと彼の味方になつたように思われた。彼は下級将校室にいる仲間の海軍少尉候補生たちと別れることを残念に思ったが、彼は士官室で艦の士官たちから温かい歓迎を受けた。彼らは彼の長い不在について彼がどんなに感じ入っているか、また、彼のこの戦艦への愛と、乗組員全員に対する忠誠心が明らかに真実であることを知っていた。それ以来長い間、彼はここが彼の本当の棲家であることをわからせるようにしていた。ここで彼はまったく自然に振る舞い、彼らはみんな彼を同等に扱うという敬意を払った。

三週間以上の間パーティーは体調が素晴らしいと感じて、気分

がよかった。仲間の士官たちと同じく、スキヤパ・フロウに停泊中、彼は他の軍艦の友人たちを訪ねた。そして五月二十八日に、ダートマス時代の古い友人、デレク・バーチと一緒に夕食を取るため、巡洋戦艦インヴィンシブル号へと船を回した。

次の朝、彼は刺すような腹痛に苦しんでおり、腹痛であることを報告し、床に就いて、彼の変わりやすい気分は落ち込んだ。テイト大尉が訪ねてきて、彼の友人も同じ状態であることを告げた時、彼はとても励まされた。「あなた方が食べたものに違いありません」

「塩漬けのサバだ。それに違いない」とバーチは叫び、呻いた。「もうたくさんだ」

「ええ、少なくともかつての病気ではありません」

まさしく、それは大きな慰めとなったが、その間も痛みは続き、彼は何度も胸が悪くなった。彼は依然痛みを感じ、寝床にいたが、五月三十日午後五時十六分、グラランド・フリート全体がスピードを上げるようにと命令を受けた。またしても間違った警報である。それがバーチに意味するのは、もし海に出たならば、横揺れと縦揺れが、いつものむかつきに加えて、彼の気分を一層悪くさせるものであるということだけであった。

その夜遅くなって、ジェリコー提督は、二十四隻の弩級型戦艦、それに加えて、インヴィンシブル号や、他の小型駆逐艦、そして偵察船を含む小型船に、午後九時半までにスキヤパを出発する準備

をするように命令を下した。コリングウッド号が旗艦コロッサス号の後を追って北海の闇に消えていったのはちょうど真夜中であつた。戦艦が今取っている航行の配列の中で、コリングウッド号は、現在形作っている、六隻ごとの船団の五番目の団にあつて、その二番手になっていた。二重の三又鉾のように、この巨大な海軍力の集結は北海の暗闇を東へと急いだ。それは船首の波の白い飛沫と、後方の航跡で見分けられる程度であつた。

夜明けにバーチは、事が起こつたということではなく、何か知らせがあつたのかどうかを聞くために、ガウンを羽織つて士官室へと手探りで進んだ。いつものように、ピーティ提督の巡洋戦艦と待ち合わせをしている時は、再び基地へと取返すことは間違いない。

「いいえ、何も報告することはございません」と彼は告げられた。「死んでいるように静かでございます」

テイト大尉は、その日の成り行きについて詳細に書き留めている。

午後二時ごろ突然、ドイツ軍の公海艦隊が出航し、わずかに四十マイルのところまで、我々の巡洋戦艦と交戦しており、戦鬨が我々の方向に向かっているという無電があつた。たいへんな興奮である。とうとう出撃だ。フルスピードで前進した。「砲撃開始」の声……その光景を想像できるだろう。寝床か

「¹」ジョンソン」が飛び出した。病気がつて？ 彼はかつてないほど気分がよかった。彼の回転砲台に向かって、長引く戦闘を戦うほど体力があったのだろうか？ もちろんその通り、そうでない訳がない。

コリングウッド号の前方の回転砲台から、バーティーは渦巻く霧の雲と、大砲と、燃えている船の煙に満ちたこの夕べで、誰よりもその交戦の、遮るもののない眺めを楽しんだ。午後六時十五分ごろ、バーティーと彼の沈まずにいる巡洋戦艦がまだ戦っている最中の、その恐ろしい戦闘の最初の証が彼の望遠鏡のレンズに入ってきた。

我々が近づくと、巡洋戦艦を率いているライオン号の船首楼の左舷に火がついているように見えた（とバーティーは後に記録している）。彼らは、艦隊の弓の列を横切らないように、右舷に向きを変えた。見渡せる限りでは、わずか二団のドイツ軍の戦艦船団（実際には六団）と彼らのすべての巡洋戦艦が出撃していた。コリングウッド号を船尾に控えて第六船団を率いていたコロッサス号が最も敵に近いところにいた。

コリングウッド号は、ドイツ軍の艦隊を断ち切るように、旗艦についていくため、新しいより南側の進路へと方向を変えたが、そ

の時バーティーは、海の中に静止してすでに損傷を受け、射程距離内にあるドイツ軍の巡洋艦を見つけた。A回転砲台の二つの十二インチの大砲を回転させ、高さを調節して標的に向かわせるという、よく訓練されて、複雑ではあるが素早いその作業がそれに続き、二分もたたないうちに、コリングウッド号の大砲は建造されてから初めて怒りの砲弾を発射した。八度の一斉射撃が放たれ、毎回一万九千トンの船にボクサーのような衝撃を与えることになった。

コリングウッド号の二度目の一斉射撃は命中したとバーティーは記し、敵艦は出火して、さらに二回の一斉射撃が放たれた後、船は沈んだと付け加えている。

数分後巨大な船の残骸が目に入ってきた。それは二つに折れ、北海のその地域の海水は浅いので、船首と船尾は二つの墓石のように海面に刺さっていた。バーティーは、部下の者たちが、これがドイツの巡洋戦艦、もしくは戦艦であると判断して、バーティー提督の一早い勝利を確認する歓呼の声を聞いた。しかし彼らがこの陰鬱な戦いの証のそばを通りすぎた時に、左舷を覗くと、彼は破壊された船の船尾に名前のプレートを読むことができた。その船はインヴィンシブル号だったが、その士官室で彼は三日前の夜、羽目をはずした食事を取っており、彼の心は、この巡洋戦艦のいずれかの残骸に仲間たちとともに閉じ込められているバーチに向けられていた。

彼らはすでもう一隻の大型船が爆破されるのを見ていたが、それは後に、装甲巡洋艦デューフェンスであることがわかった。そしてついに彼は霧を通して主要な敵方の戦艦隊を捉えたのだが、霧は一瞬にして一マイル以下に視界を閉ざした。それからすぐに南に十二マイル見渡せることができるほど突然に晴れ上がった。ここで水平線は、巨大な煙の覆いの下、見えないドイツ軍の戦艦と巡洋艦の影でいっぱいになっているように思われた。開戦から約二年たった後にもそれらはそこに存在する。パーティーは大いなる不思議さと畏敬を感じたが、すぐにそれらを破壊する決意をした。

敵方の巡洋艦ダーフリンガーはほとんど四海里離れたところにあって、黄色いドイツ軍の砲口の光が巨大なマッチの発火のように光ったが、その時Aタレット回転砲台はその船に向けられ、再び火を噴いた。「双眼鏡を通して敵側の船の横に巨大な穴が空いて、後甲板の裂け目から舞い上がる炎で、溶鉱炉のように赤くなったメインデッキがむき出しになっている」のが、パーティーに見えた。

パーティーの記録はこう続いている。「コリングウッド号の一斉砲撃の一つが後方の回転砲台の船尾に命中し、それが恐ろしい炎となって燃えた」しかしすべての敵側の戦艦のようにそれは航路の向きを変えて、濃くなつていく霧の中に見失われてしまった。

戦艦隊の退却を援護するために仕掛けられたドイツ軍の駆逐艦の攻撃に対して、コリングウッド号の四インチの大砲が、逃げていく小さなドイツ軍の艦に激しい火を噴いた。そして二基の魚雷をなんとかかわした。一つは船尾をかすめ、もう一つは前方を通り過ぎていった。

グラント・フリートの戦艦の一隻もその突発的な夜の戦闘には加わらず、それは主に駆逐艦と軽量級の巡洋艦の間で行われたものであった。そして敵の気配がなく、敵の戦艦隊が再び見つかるという期待がほとんど持てないという失望が夜明けにおそってきた。というのは、戦艦にとつてその交戦は霧の中の小競り合いとほとんど変わりがなかったからである。しかし巡洋艦はいつ何時でも戦いをし、ニュージブラント号は何の損傷もなく、無事であったが、他の巡洋艦のどれよりも、より確実な正確さと効果をもって大砲を発砲した。しかしジョージ・バツテンバーグはその十二インチの回転砲台で疲労困憊の時間を過ごした。パーティーと同様、彼はその戦闘の後、ジェリコー提督の殊勲報告書において名前が出て、彼らはともに栄誉に浴し、それを大切にされた。

それは徹底的な交戦ではなかったかもしれないが、その戦闘を見たすべての者と同様に、パーティーにとつての影響はたいへんなもので、それは彼の生涯にわたつて続いた。「ある夏の午後、彼は成人の十分な威厳をもつようになった」と、彼の伝記作者は

結論づけている。「彼は戦闘の興奮を感じ、勝利を他の者たちと分かち合う誇りと、この勝利から最終的な充実感を奪うその悲しみを知っていた」

何よりも、バーティーは若者の最終的な試験に合格していたのである。それと並べてみると、オズボーンとダートマスの学問的な失敗は取るに足りないもので、今は忘れられている。彼は恐怖の試験を受けさせられ、たいへん素晴らしい点数で合格したのだ。「回転砲台の上にいる時、砲弾の恐ろしさも、他の何も感じなかった」とデヴィッドに手紙で書いている。「それは奇妙に思うかもしれないが、危険であるという感覚と、すべての可能な方法で敵に死を報いたいという以外の他のすべての望みがなくなった」

バーティーの死に対する態度は、彼の世代の中でも単純なものであった。もしそうでなかったら、耐えがたいものであったろう。戦闘後の苦悩を、それは軽減した。彼はインヴィンシブル号の者たち以外の友人も失った。しかし「このような規模の戦争において、我々は負傷者や、行方不明の船や部下を持たざるを得ないが、故国にいるすべての人にとって、彼らが国のために死ぬことを誇りに思っているならば、その損失を悲しむ必要はないのである」と彼は書いた。

「ユトランド半島の流血」で、バーティーは彼の父親の評価も取り戻した。「私は息子をうれしく思っている」と王は手紙に書

いて、ガーター勲章を彼に叙勲することを決意した。「それが世界で最も古い騎士道の勲章であることを忘れないように」バーティーは、その叙勲のメダルやローブ以上に、彼の父が彼に対して新たな敬意の確認をしたという意味によっていたく感銘を受けた。「私はそれを与えられることをたいへん誇りに感じているし、その期待に答えようと常に努力するだろう」この出来事はメイ王妃の日記の中にはわずかな言及しかなく、ジョージ国王の中にはまったくなかった。

その戦闘の一年後、バーティーは大尉代理としての地位をもつて、ユトランド半島でそれ自身の真価を十分に実証していた、十五インチの大砲を持つ銃艦、超弩級のマラヤ号の兵役につくため出頭した。テイト大尉は今や副長となつて、他の旧友とともにやってきた。しかし何よりもましてバーティーは、交換条件でドイツ軍の収容所から解放されていたルイス・グレッグと再会した。彼はその戦艦における外科医としての任命を受けていた。「真の相棒として友人を持つことは素晴らしく、たいへん愉快です」とバーティーは母親に手紙を書いている。二人の若者はこの戦争の終わるまで離れることはなく、その後数年もそのようであった。ユトランド半島はバーティーを男にしたのである。そしてグレッグはその後の生涯バーティーを磨き上げ、一人前にすることになる。

「そう、それは起こるべくして起こる」と、姉にハンスルは書いた。「多くの人々が戦争を短期的な不都合と見なすけれど、我々が立ち向かうのは恐ろしい将来である」彼は、ヘンリー王子とジョージ王子と一緒に教えていると続けた。彼が他の科目に対処する一方で、ポーシヤン夫人は彼らにフランス語を教えていた。弟が勤勉で知的である一方、イートンはヘンリー王子を大いに飛躍させた。最も若いデヴィッド・ボウズ・ライアンは、ラボック氏の寮で次の学期から、ヘンリー王子と一緒になることになっていた。少年たちはスコットランドに行くことを切望していたし、一家が当面はバルモラルへ移動することに疑問の余地はなかった。一九一四年八月にスコットランドに行くことを切望した若者はハリー（ヘンリー）とジョージだけではない。別の二人は、しぶしぶセントジエームズ宮殿広場に留まっていた。戦争の初日のロシアム劇場で、エリザベス（訳者注…後にバーディーと結婚する）とデヴィッド・ボウズ・ライアンは、インドとビルマのダンスをするロシヤナラを見た。そしてリピンスキー座の女優を楽しんだ。しかし、何よりも、彼らは「役者犬」と呼ばれている出し物が気に入った。それは、エリザベスにとっての十四回目の誕生日の楽しみであった。

彼らが十一時に劇場から出てきた時、通りは人で混み合っている

た。待っている馬車まで人を避けながら、デヴィッドはエリザベスを守るようにして彼女の手を握り、彼らの両親は二人の後について行った。

「さあ、ちびっこたち、歓迎の一杯はどうかな」と、横目で見ている酔っぱらいが彼らの行く先に立って叫んでいた。「宮殿に来るんだ。お前さんたちが国王と王妃、そして、この国を愛していることを示してやれ……」

デヴィッドは十二歳で、彼の年齢の割には背は高くなかったが、男を脇へ押しつけて、エリザベスを急いで連れて行った。「すべてがお姉さんの誕生日に起こっているようだね」と、彼女に言っていて、微笑んだ。エリザベスは群衆の中で自分自身の身を守ることが十分にできると感じたが、彼女は、保護的な役割を演じているデヴィッドを見るのが好きで、また、彼がどれくらい誇りをもっているかを知っているのがわかってきた。その間に、彼らの父は今も彼らに追いついて、彼らが邪魔されないので確実にするため、馬車までの最後の数ヤードの責任を引き受けた。

二階建てバスのデッキで踊っている人々がいた。そして、夜分のそんな時間にはたいがい人気がなく、人目をはばかりほど静かなセントジエームズ宮殿広場でさえ、歌ったり、中心の庭の手すりにもたれかかって、舗道に座り込んでいる人々がいた。

「第一次世界大戦の最初の数日は、非常に忙しかったわ」と、エリザベスは思い出す。「私の兄弟はみんな、もちろんデヴィッ

ド以外だけど、―彼はあまりに若すぎたの―それぞれの連隊に参加して、三月で六〇歳になる父でさえ軍服を着用しました。しばらく、セントジエーム宮殿広場の私たちの家は、家というよりも兵舎のようで、ファーガス、パトリック、ジョック、マイケルがあたりを音をたてて歩き回り、短刀と剣、そしてライフルさえホールに置きっぱなしにしていました。デヴィッドと私は、戦争に対するこのような準備に参加せず、ほとんどすべきことがなかったの―彼女の伝記作者に、エリザベスは「あらゆる種類の薬一式を求めて薬剤師へ急いで行ったり、また、人々が戦争のために望むすべてのものを買うため鉄砲かじへ行つたそのせわしなさ」について話した。

それから突然、彼らの母は彼らの無為に気がついたようで、うれしいことに、彼らはスコットランドに行くことになっていると言つた。鉄道業務は、軍隊と水兵の移動と、スパイに対する保安対策によつてすでに混乱していた。「それはみじめな旅行であつた」と、デヴィッドは書いた。「電車は七時間遅れ、我々は一晩中起きていなければならなかつた。そして、グラミスについて着いた時、我々が一週間後に母と到着すると思われていることがわかつた。下男の人かかは地元の大隊（第五高地連隊）にすでに加わつており、そして、妻帯者の妻たちは、彼らがフランスに立つ前でさえ、ひどく心配していた」

ハウス・パーティーもなく客もない、「親愛なる古めかしい

グラミス城の薄気味悪さ」をデヴィッドは語り続けた。「ライチョウ猟開禁日は、不思議な静寂とともに過ぎ去つた」来るべき冬に備え、軍隊にとつて居心地良くするものを探すようにと、メイドたちは言い渡されていた。トランクは物色され、古いコートと狩猟服、ピクニック用の敷物とウールのジャンパーの各種取り合わせはホールに置かれた。「球突き台には、『居心地良くするもの』が積み重ねられてあつた。つまり、厚手のシャツとソックス、マフラー、腹巻、そして、裁断されて、何らかのニスが施される羊皮のコートである」デヴィッドとエリザベスは、テニスやクローケーをしたり、芝生で彼ら自身の考案したポロの試合で自転車に乗ることにより、その場所にかつての生活の一部を取り戻そうとした。

彼らの母は、八月二十三日に彼女のメイドとロンドンから到着した。母のセシリアはニュースと計画でいっぱいであり、そして、到着したすぐ後、それを昼食のテーブルの席で明かした。「ファーガス以外すべての男性はそれぞれの兵舎に出发し、彼は土曜日に行くことになっています」と、彼女は話した。「お父様は、しばらくの間ロンドンに残っています。彼には戦争について若干ばかげた考えがあるの、信じてもらえるかしら。『あらゆる男性が必要になる』と、彼は言い続けています。本当にお父様つたら。でも、彼は経験を生かしてある種の参謀の指名を得るかもしれないわ。それから、グラミスをどうするかね」

「ここを閉鎖するつもりなの？ お母様」と、エリザベスは心配そうに尋ねた。

「いいえ。でも、病院に変えることを考えているの」

デヴィッドは、彼の耳を信じてることができなかった。「病院ですか、お母様。医者と看護師がいて、手術台のある。でも、ここは人里離れた所だし……」

「むしろ傷病回復の施設ね」セシリアは訂正した。「お父様は、陸軍省で問い合わせをしています。何が最も求められているか知るために、キッチナー卿と話し合うことでしょうか。」

「それから、来月に二組の結婚式を行うつもりです。フランスに派遣されないならば、最初にジョックがフェネラと結婚するでしょう。そして、ファーガスは彼のクリシーと結婚するのよ」

二人とも、しばらくの間婚約していた。ジョックはクリントン男爵の息女、フェネラ・ヘップバーン・スチュアート・フォートブズ・トレフェューシスと、そしてファーガスは、パーリントン伯爵の二十四歳になる二番目の息女、クリスチャン・ノラ・ドーンソン・デイマー嬢と。彼らは、一九十五年の春まで結婚するつもりはなかったが、戦争によって突然切迫したことから、二人とも、おそらく彼らが死ぬ前に、すぐに結婚することに決めた。

それから、戦争の最初の数日の無為は、激しい勤労に変わった。「勉強は疎かにされました」と、エリザベスは語った。「というのは、その最初の数ヶ月の間、我々は編物ばかりして、シャツを

作るのにとっても忙しかったから……。私の主な仕事は、もはや音をたてなくなるほど柔らかくなるまで、薄紙をもみくちやにして、寝袋の裏に入れることでした」

十二月までに、グラミスの巨大な食堂は、向かい合う二つの壁に沿ったベッドの列と、真中にもう二列のベッドがある病棟に変えられた。

デヴィッドはイートンに出発し、エリザベスを寂しくさせていた。通常、グラミスには、彼女の年齢と同じ子供たちが両親とともに訪ねて来ていた。しかし、彼女の兄弟の結婚式を除いて社交的な生活は停止した。ファーガスは、はるか南のサセックスで結婚した。しかし、九月二十九日に、ジョックはスコットランドで彼の花嫁と結婚した。そして、それは時代に合う厳格な儀式ではあつたけれども、花嫁の付添いの一人としてエリザベスは、彼女の髪に遅咲きの秋の花を挿し、青い絹の服を着た。

「それは、美しい結婚式でした」と、エリザベスは思い出す。「フェネラはとても美しく見え、そして、その危険にもかかわらず、すぐに前線へと出発する軍服を着た花嫁がいて、戦時中の結婚式にはいつも特別に感動的な何かがあります」

地下室は食堂に変えられ、壁の鹿の角と鎧一式、恐ろしい斧はそのままだされたが、後に患者たちの間で何度も下品な会話に取り上げられた。エリザベスの姉ローズは、すでに彼女の看護師のト

レーニングを終了して、負傷者を世話するのを助けるためスコットランドにやってきた。一方、セシリアは、女主人という役割における娘の技術において自信に満ちており、一種の代理をエリザベスに任せた。

最初の負傷者がいつ来てもよかった、そして、エリザベスは「いつものようにお菓子ではなくて、ウッドバイン（タバコ）、ゴールドフレーク、ネイビーカットなど買い慣れてないものを買うために、ある日村のお店に行ったこと」を覚えている。

男たちが、一九一四年十二月十二日の午後四台の救急車でダレンディーから到着した。そして、彼ら十六人すべてが手術を受け、大部分が弾丸と破片による傷の手当てをされて、その診療所に入った。彼らは他の何よりも安静と休息が必要であり、そして、グラミス城は過去にたいへんな暴力と流血を見てきたわけだが、対照的なそれらを提供することになった。

男たちの何人かは、それについて確信していなかった。後に再び戦争で二回傷つくけれども、戦争を乗り切った彼らのうちの一人は、傷ついた彼と彼の仲間が「血まみれの大きな城で貴族とともに」暮らす不安を思い出す。歩兵のミック・マクマホンは言った。

俺はダンディー王立病院で看護師にそれについての不満を言ったが、仲間の何人かもそうだったよ。たとえ俺たちの何人かがまだ思わしくなかったとしても、みんなはクリスマス

に家に帰りたかった。シドロールヒルズを越えた、それは長いドライブで、そこに着いた時、俺たちはかなり参っていた。雪が降っていて、ひどく寒かったよ、本当に。城は俺がこれまでに見た一番でかい建物で、尖塔や何かのあるバッキンガム宮殿よりずっとでかかった。

俺たちはばかでかい門を通り抜けて、正面玄関に乗りつけた。二人の看護師と中年の女と、女の子がそこにいた。彼女たちは挨拶して、俺たちが中に入るのを助けてくれた。その女が伯爵夫人で、中に入ると、俺たちみんなに順繰りに話しかけてくれた。数人は松葉づえをついていたり、または、車椅子に腰かけていて、俺を含めて三人は担架に乗っていた。それから、その女の子が俺たちに近づいた。彼女は可愛い微笑をしていた、ああ、それは素敵だった。そして、見事な青い目。まるで俺がただ一人の人であるかのように、彼女は本当に俺のことを心配しているようだった。俺がどこから来たとか、俺がとても痛がつているのかとか、そんなことをね。それは俺を元気づけてくれたよ、本当に。

その後エリザベスが来て、毎日男たちと話し、すぐに彼らの名前を覚えて、彼らみんなの家族について事細かに記憶した。彼ら何か欲しがっていないかを尋ね、求める人々のために手紙を書き、もしあれば幸運だが、手紙を渡し、手に傷を負って開けることの

できない者たちの代わりに封筒を開けた。ある負傷者は盲目になつていた。幸運にも、彼はほぼ毎日母から手紙があり、エリザベスはいつも彼に、他の誰にも聞こえないほど小さな、優しい声でそれを読んだ。

負傷者たちが到着して数日後に、イートンでの一学期を終え、デヴィッドは帰ってきて、彼の役割を演じた。彼とエリザベスは、男たちのためにクリスマススの包みが到着するのを慎重に調べ、十二月二十三日に、家や友人から何も届かなかった人々のため、万年筆半ダース、缶入りパイプタバコといった、若干のシンブルな緊急プレゼントを買うためにフォーファーまで車で行った。

クリスマス・イブに、みんなでヒバリを飼おうと私は思った（とデヴィッドは思い出す）。ローズのものであったスカートと外套とボタンのついた靴を身につけ、私は女性の見舞い客を装った。私は羽根帽子とベールをつけ、エリザベスが病室の中を私を連れて回って、彼らがどんな様子か見に来た病院の見舞い客で、彼女のいとこであると私を紹介した。

私は、順番に彼らとそれぞれ会って、病院の見舞い客が尋ねると思われる質問を、優しいが、高い声で尋ね、エリザベスはもう少しで吹き出す寸前だったけれども、私は一度もくすくす笑わないでいた。

私は彼らが本当は多分知っていただろうと思うが、彼らは

非常に親切で、私の小さな冗談に調子を合わせてくれた。そして、クリスマスに私が「女性」が誰であるかについて彼らに話した時、驚いたふりをした。

デヴィッドとエリザベスにとつて、十六人の負傷者と一緒にグラミスで、彼らの初めてのクリスマススを過ごすことは奇妙なことであった。彼らのうちのある者はひどく包帯されていたり、ギブスをしていたり、またある者は手足がひどく損なわれていたり、火傷をしていた。しかし、すべてが夏から変わっていた。そして、それは今や別世界のように思われた。従軍には年を取りすぎた庭師の一人が、息子に手伝われて、敷地から大きいクリスマス・ツリーを持ち込んだが、これがデヴィッドの助けで地下室に立てられ、エリザベスがその幹のまわりにプレゼントを積み重ねて、それを金糸銀糸とロウソクで飾った。

エリザベス・ボウズ・ライアンの正規の学校教育は、一九十四年の戦争でほとんど終わった。しかし、彼女に彼女のライフワークの準備をさせる教育は、彼女の姉がかつて「グラミス大学」と呼んだところから始まった。²ローズ・ボウズ・ライアンは、結局グラミス予後保養所の看護師長となり、戦争の大半を彼女と働いたエリザベスは、彼女の姉のプロとしての監督役に対して友人であり、慰める立場であった。二つの仕事は、どんな病院でも、それ

らのはっきりした境目を時々失うものだが。

教室から戦場へとまっすぐに行進した何万もの青年が、永遠に高等教育のチャンスを失ったが、戦争の経験から強さ、道徳的精神と決断力を得たように、エリザベスは、十四歳から十八歳への感じやすい年齢に、不自然なほどの速度で成長し、一方で、精神力の強さ、更には、どんな背景や年齢の人々とも意思伝達する優しさと技量を会得した。

一九十五年の晩夏のエピソードは、エリザベスの新しく身につけた権威の感覚を明らかにする。たとえそれがこの場合満足のいかないものであったとしても。アーネスト・パーン伍長は肩に重傷を負い、手術後、エリザベスの十五回目の誕生日のすぐ後に、グラミスに送られてきた。偶然に、パーンがある暑い午後旗竿塔の最上部まで上がって、彼女の黒毛のスパニエルのピーターとエリザベスをそこで見つけた時、二人はもう友人になった。彼らがお互いに話し始めた時、伍長は旗が竿の基で横になっているのに気がついた。

私は旗が一番上にある方がより良く見えると言ったので、我々はそれを引き上げることに決めました。私たちはそうしました。それが上に着いたちょうどその時、風が竿の上部からみつかせ、私たちがどうやっても、それは広がった状態になりませんでした。

私は、それがちゃんとしてなくてはいけない、そして、上に登ると言いました。彼女は、「そんな！アーネスト、あなたはそのようなことをしてはいけないわ。腕が二本あっても、安全ではないでしょう。腕一本を吊りひもに下げているは、頭がおかしいのも同然よ。あなたはそうすべきではありません」

私は言い訳をして、やってみるつもりであると言いました。これについて彼女は小さい足を踏み鳴らし、私を止めようと、「頑固者」「ブタ頭」「無鉄砲」とあらゆることを言いました。それから、彼女は、私を制止しようと他の誰かをつかまえるために走って行きました。それは難しい仕事でしたが、私は何とかよじ登って、旗を引っ張ってゆっくり下にすべり降りることができました。地下室へ降りた時、私は戻って来ているエリザベス嬢に会って、それをやったら彼女に話しました。彼女は、驚いて私をじっと見つめました。「でも、アーネスト」と、彼女は言いました。「あなたにそれができるとは思わなかったわ！あなたは頑固者ね！」そう、親愛なるグラミスで彼女とみんなにさよならを言う日は、悲しい日でした。

パーン伍長は、この時十五歳のエリザベスと、グラミスでの生活を最も雄弁に記録していた。彼女の命令に従わないにもかかわら

ず、彼は彼女を崇拜したようである。

彼女は、私がこれまでに見た最も素敵な青い目を持っていました。何か言わんとするような、非常に表現力豊かな、雄弁な目です。彼女は話す時、ときどきほんの少し額にしわを寄せる癖がありました。そして、彼女の笑顔は心をほっとさせるものでした。

私は、特に彼女の格好の良い頭の前の、一種の垂れた前髪があるのに気がつきました。彼女の齒は、均一で非常に白く、健康的に収まっていて、話をする時、私を本当にまっすぐに見ました。要するに、彼女は私にとって、とても魅力的な小さい貴婦人で、たいへん楽しい仲間であるように思えました。

エリザベスは通常夕食後に、彼女の母や姉と一緒に降りてきて、患者と話し、彼らがタバコや筆記具、その他の小さな気晴らしになるようなものがあることを確認するのだった。それから、彼女はホイストのゲームをすることがあった。

私はよく彼女のパートナーとしてプレイし、何を出すべきか確信がない時、彼女はカードで額を軽くたたいて、しばしば全く無頓着にその表を見せてしまいましたが、私にはそれが非常に面白かった。もちろん、この時期に、彼女はちょうど

ホイストの仕方を学んでいるところでした。困った時、私を見て、「アーネスト、何を出すべきか私に教えてよ」と言っただけです。我々は何度も楽しいゲームを一緒にしました。

姉のローズが語ったように、エリザベスが彼女の母から「ますます多くのことを引き継いだ」理由の一つは、戦争によって初めて家族の惨事が発生したことであった。ファーガスが一九一五年九月に二、三日の休暇で帰って来て、彼の妻と彼らの二カ月の赤ちゃんと一緒にグラミスで母を訪ねた。彼は、九月二十日に連隊に戻る前、二、三日しか過ぎさなかつた。それはルーの戦闘の前日であった。

英国皇太子のデヴィッドが、前線の後方数マイルのところにある司令部にいて、攻撃に加わりたいと訴えても無駄に終わっていた一方で、ファーガス・ボウズ・ライアンはドイツの「ホーエンツォレルン家城塞」に対する攻撃において高地連隊の仲間たちを率いた。彼は攻撃を受け、九月二十七日に死んだ。二十六歳であった。

そのニュースは、グラミスの弱り切ったストラスマア家に対する破滅的な打撃となった。ファーガスは、セシリアの目に入れても痛くない息子であり、彼の死は、赤ちゃんと一緒に彼の最近の面会のためにさらに心をえぐるものだった。彼女は憂鬱な状態になって、自分の部屋に閉じこもった。

後の、戦闘中のマイケルの死亡報告は、セシリアを殺したも同然だった。デヴィッドはイートンから彼の母を慰めるため家に呼び戻されていて、陸軍省から彼の死の最初の知らせが来た時、それを信じるのを、そして他の者たちのように意気消沈するのを拒絶した。エリザベスは、彼の陽気さをたしなめた。「あなたが家の中で口笛を吹いたり、冗談を言ってもお母様にはちっとも慰めにはならないわ」

「でも、彼は死んでいないよ。わかるんだ。僕は、二回彼を見た。彼は、モミの木に囲まれている大きい家にいる。でも、彼はとても具合が悪いと思う。なぜって、彼の頭が布で縛られているから。僕は、陸軍省が何と言おうと気にしないよ。彼が生きているって知っているから」

まさにデヴィッドが彼を「見た」ように、頭にはひどい傷があるけれども、とうとう、マイケルが捕虜であるというニュースが知れわたった。彼の母は、彼が生き残っていないことを確信していた。「しかし、神を賛美せよ、³マイケルは帰ってきました」とローズは思い起こす。

一九十八年十一月十一日の停戦日に、グラミス予後保養所には、ほぼ四年間そうだったように、十六人の患者がいた。全体で約千五百人の男たちがここに避難し、ローズと彼女の看護師に世話され、「灯りをもつ貴婦人（ナイチンゲール）でなく」、彼女の患者の一人がそう呼んだように、「笑顔のある貴婦人、素晴らしい

エリザベス嬢」によって、慰められ、楽しまされ、元気づけられまたとりこにさえなっていた。かつての大食堂にある壁の大きな掛時計の長針が十一時の方へ進んだ時、彼女はそこにいた。

四人のベッドに寝た切りの男、四人の車椅子患者、重傷の痕跡を見せている残りの者たちを、エリザベスはしっかりと管理していた。彼女は椅子の上に立って、時計に視線を合わせ、戦争がついに終わったことを示した時、流暢ではあるが、しっかりと声で「万歳を三回唱えましょう」と彼女は呼びかけた。そして彼らはそうした。「そして、神よ、国王と王妃を守り給え」

彼女はすでに十八歳になり、髪を上げていた。彼ら全員が彼女を見て、笑ったり、歓声を挙げたので、彼女は微笑んだ。それから、「神に祈り、勝利とこの戦争の終結のための感謝をしましょう」と彼女が言った時、彼女の表情は厳粛になった。ひざまづける者とエリザベスは床にひざまづいて、彼女の前の一人用の礼拝席として椅子を利用した。

ロンドンのコロシアム劇場で、エリザベスにとってひどく騒々しく始まった戦争は、四年と三ヵ月後沈黙と祈りの中で終わった。

9

ドラムランリッグのエリザベスの隣人、アリス・スコットに関しては、彼女らが、最後の平和な夏に会って、一緒に遊んだ時以

来、彼女は全寮制の学校にいた。休暇中の戦時業務は、木の脇枝を切り落とすこととコケを集めることに限られていて、枝を落とす人の大半は軍隊に加わっていた。ミズゴケは、ヨウ素を含んでいるので、傷の手当てをするうえで綿に代わる良質な代用品であった。「私たちは、袋にそれを集めました」と、アリスは思い出す。「そして、乾かすために、芝生ではこりよけのシートの上にそれを広げました。その後、病院に送ることができるようになる前に、ヒースと泥炭、死んだカエルと他の異物すべての細かなかけらを見つけないけませんでした」

戦争が終わった時、アリスはまだ学校にいて、彼女の階級と富をもつ大半の同時代人より良い教育を受けていたが、内気で、控え目であり、馬に乗っているか、ガールガイドの制服を身につけている時だけ、人付き合いは楽であった。今では（一九一九年）彼女はメアリー王女の親友であり、メアリーもガールガイドに対する熱意を共有していた。「私は非常に内気で、かなり太っていました。メアリー王女の誕生日に、私はウィンザーのダンス・パーティーで、白いサテンのワンピースに体を無理矢理押し込んで、惨めな社交界デビューをしました」

メアリーの弟ハリーがそこにいるべきであったが、病気のため出席できなかった……。

ヨーロッパで大戦が勃発した一九十四年の夏は、ボルチモアの

ウォリス・ウォーフィールドにとっても寮生活の終わりであった。「一九十四年卒業組は、吹奏楽も祝賀会もなく世界に出て行きませんでした。オールドフィールドズの私のクラスからは一人の女の子も、大学に行きませんでした」と彼女は記している。

その代わり、その先に吹奏楽と祝賀会が待ち受けていて、学校を出たばかりのウォリスのクラスのすべての女子と向き合う未来の夫たちにとって、競争の場所となる。「私たちが期待しなければならなかった唯一のものは結婚だけだというのではなくて、結婚しているという状態が、女性にとって望ましい唯一の状態のように思わせられました。そして、早ければ早いほどよいのです」と彼女は言った。

育ちの良いボルチモア娘のための結婚の準備に関して、その未来に、人物の紹介と舞踏会、地位に関する息もつけないほどの思惑、青年たちの適格性と婚姻の可能性、クチナシの重要性、式の華やかさと結婚のしきたりがある。

しかし、戦線から三マイル離れたここでさえ、軽いそよぎのようだとっても、戦争の強風はやはり感じられた。ボルチモアは百パーセント親英的で、支持する態度として、戦争が続く間、「それぞれの社交的な会場における優雅さの競争の破棄」を宣言する公約に、ウォリス・ウォーフィールドを含む三十四人の社交界デビューする女性が署名した。

このことはたまたまウォリスにとって幸運なこととなった。と

いうのは、彼女の家族を全面的に養っていた信託財産が、彼女の継父の死亡で停止し、そして、「私の母の限られた財産はある種の贅沢禁止を必要とした」からだ。たとえば、彼女の夜会服をファッショナブルなデザイナーのフューシヤルに注文するのではなく、エレンと呼ばれる黒人のお針子の仕立てにウォリスは頼らなければならなかった。

戦争の最初の冬には、ウォリスと彼女の同時代の人々は、「電話での際限のない友人とのお喋りや、互いの家での社交界デビュー前の昼食、ベルベデーレ・ホテルでの、再び同じ人々とのティータイム・ダンスとお喋り、そして、常にかたいへん重要な小さな事を次々に追いかけるおかしなあわただしさで過ごした」

ウォリスほど魅力的で、結婚という賭けで勝てそうな女性は他にいなかった。彼女は、花束を抱えたハンサムで、裕福な若い男性に決して不足していなかった。しかし、ヨーロッパでの戦争がさらに深刻になった一九十五年の春に、ウォリスは、彼女自身の社交界デビューのパーティー、ボルチモアの噂話になるような素晴らしい舞踏会を開くつもりでいた。「ソール伯父さん」こと、S・デーヴィス・ウォーフィールドは、ウォリスと彼女の母が財政的な資金を頼っている裕福な親類だが、彼が戦争慈善団体と救済基金の重鎮であったので、彼はこれ見よがしに舞踏会にお金を使うことは適切でないと判断した。そういうことになったわけだが、「私には痛手だった」と、ウォリスは不満を言った。

しかし、いとこは可哀想な彼女を憐れみ、ワシントンの海兵隊員の兵舎で、祭り用の赤い上着を着た、総勢六十人の海兵吹奏楽隊が音楽を奏する、大がかりなティーダンスを催してくれた。

「ボルチモアから来た女性たちは素晴らしい回転技をした」とウォリスは言っている。その後の数カ月はウォリスにとって、素晴らしい変化の連続だった。彼女は自信がついて、一人の男性を選び、彼に決める時が来たことがわかった。一九十六年、ユトランド半島とソルメの戦闘（百万人の犠牲者があった）の少し前、「私は、世界で最も魅力的な飛行士に会ったところですよ……」と始まる手紙をウォリスは彼女の母に書いている。

アメリカ海軍のアール・ウィンフィールド・スペンサー・ジュニア中尉は、ペンサコラのできたばかりの飛行場で飛行士のインストラクターをしていた。彼らは、ウォリスのいとこ、コリーン・マステインを通して出会った。彼女は海軍の大尉と結婚していた。マステイン大尉は自宅で彼の下級士官のために昼食会をし、しばしば開き、ウォリスがスペンサー中尉に会ったのもその一つであった。彼女が彼を初めて目に留めた時、「日に焼けて、細身の」彼は上官と一緒に家の方へ歩いてしたが、コリーンとウォリスによって観察されていたのだ。

「彼は笑っていた」と、ウォリスは懐かしむように思い出す。「それでも、すぐに私の心に訴える内包する力と活力の現われがありました。彼のごく短く切りそろえた口ひげは、印象的な彼の

顔立ちに、ある種の大胆さを与えました」

昼食で、ウイン・スペンサーの反対側に座って、「これまでにないほど、私は興奮して、感動していました」と、ウォリスは覚えていた。「強くて、自信があつて、洗練されている、私にとつて未知の男性がここにいる。彼は何が欲しいかわかつていて、それを手に入れる能力について自信に満ちている」

彼の側になると、この初めての顔合わせで、このパイロットは、ウォリスについて同じくらい強く感じたように見える。顔を合わせる事がその後何度かあった。彼らは浜辺を歩いて、貝を集めた。彼は彼女にゴルフを教えようとしたが、それは二人が近くで触れ合う十分な機会を与えた。ウォリスは、あまりゴルフが好きではなかったが、ウインと一緒にいるという、心が温まる感覚のために、喜んでそれを我慢した。結婚の申し込みが、驚くほどの性急さで、カントリークラブの階段でなされた。ウォリスは時間が欲しいと言ひ、ウインは理解があつた。彼女の母は、警告するような注意を与えている。空を飛ぶことは危険である、彼女は軍人の生活を堅苦しく感じるのではないか、等々。そして、シカゴ証券取引所の裕福な仲買人の妻である、彼女の将来の義母も同様に感じた。

一九十六年十一月八日は、英国皇太子のデヴィッドが、ボーモント・ハーメル南西で流れ弾によって死にそうになった日だが、ウォリス・ウォーフィールドはワシントンでウイン・スペン

サー中尉と結婚した。「それは、フリルがいつぱいの結婚式でした。何百人もの人々がいて、紙吹雪、多くのスピーチ、ホワイトハウスほど大きいケーキがありました、まあそのように見えたのですが。そして、ウォリスは素晴らしく見えました……」

花婿が激怒したことに、新婚旅行の初日のホテルには酒がないということがわかった。「アルコール飲料は、敷地内で売ってはなりません」しかし、先見の明のある水兵は、彼のスーツケースの底に一本のジンを隠し、ウォリスは人生で初めてアルコールを味わった。無垢は終わりとなった。

10

思慮のない反ドイツの「憎しみ」ほど、強く戦争の腐敗を示すものはなかった。それは、宣戦布告のすぐ後に、報道と、一部の国会議員、そして有力で無責任な個人によってあおられた。国家の統一性、道徳上の勇氣と真実が、反ドイツ連盟のような不愉快な団体によって増大した中傷と憎悪の波によって一蹴された。愛国心がないとか、さらには売国奴であると分類されることを恐れて、それに対して反対意見をあえて述べる者はほとんどいなかった。

この中傷の運動は、初代海軍省長官の執務室や、ドイツ訛りの話し方をする教授のいる大学、大都会ロンドンと地方の商店でも

止むことはなかった。ゆつくりと、しかし恐ろしい無慈悲さで、それは、流れゆく悪臭を放つ雲のように、海軍本部からジョージ国王とメアリー王妃の邸宅までのセントジエイムズ公園周辺に広がった。

（日付、住所の記載なし）

親愛なるロイド・ジョージ殿

我々がイギリスの国土からこういったドイツ人を追い払って
もい頃ではないか。私はそう思うし、私の家族と友人も同
様である。そして、私はすべてのドイツ人を意味している。
我々の素晴らしい海軍をドイツ野郎に指揮させたり、大法官
のようなもう一人のドイツ野郎に我々の法律を任せておくの
は非常にまずかった。しかし、我々の主権を有する国王と王
妃としてはだめだ、というのが私の言い分である。我々に君
主制がなければならぬならば、それは英国人でなければなら
ない。国王と王妃と彼らの家族すべてを、彼らが元いたド
イツに送り返しなさい。

敬具

（署名）匿名

一九一七年の春に、何百という手紙がダウニング街十番地に配達された。理由を見つけないのは困難ではない。二年半以上の殺戮と破壊の後で、戦争の勝利と終結は、少しも近づいているように見えなかった。西部戦線での度重なる大攻撃は、数万の負傷者をもってようやく停止した。ダーダネルス海峡は長いこと撤退したままで、何千ものオーストラリア、ニュージーランド、イギリスとフランスの兵士の死体が残っていた。イギリスの都市は、上空から砲撃された。ユーボート攻撃による輸送の損害（ほぼ百万トンが四月に沈んだ）はイギリスを飢餓に近い状態にし、一方、戦争の費用が国を破産させる恐れがあった。

戦争の最初の数日から、市民は反ドイツの報道と感情を浴び続け、その時にはドイツ人に対する心情は山火事の熱と同じくらい激しくなっていた。ロシアの敗北は広く皇帝ニコライの「冷酷で腐敗した支配」に帰せられ、イギリスでは共和主義は反ドイツ民族主義と同意義になった。憎しみは至る所にあつた。戦争不当利得者と同じくらいにユダヤ人に対しても、戦闘服を着ていない若者に対しても、かっぱらいに対しても。

ロンドンのアルバート・ホールでの大集会で皇帝制度の没落を祝い、検閲官はすべての仔細なレポートの公表を禁止した。しかしながら、タイムズで発表されたH・G・ウェルズからの手紙は検閲されなかった。それは共和制社会の形成を推進するものである。彼もまた「外国人で退屈な王室」について書いた。ジョージ

国王は、彼の国が命をかけて戦っている時、これらすべての扇動的な表現によって憤慨していた。彼の伝記作者の父は、国王が「私は退屈な場合があるが、私が外国人であるならば、私は地獄に落ちるだろう」と言い返したと後に伝えた。

ジョージ五世が外国人でないならば、では、彼は何であったのか。誰も彼の名前さえはつきりしていなかったが、彼と彼の家族に対する復讐心が増大するにつれ、その名前を見つける試みがなされた。王立紋章院のファナム・バーク氏は、彼の名前はゲエルフであろう、しかし、より可能性があるのはホイッパーまたはウエッティンであるかもしれないと思った。確かなことは、罵られたドイツ皇帝がホーエンツォレルン家であるのと同様に、彼がハノーファー家の人間で、サックス＝コーブルク＝ゴータの出だったということだけであった。

「今や英国皇太子がドイツの砲弾で殺される時なのだ。それで多くのトラブルを、今も、そしてその後も收拾するであろう」と、一人の皮肉屋は断言した。それが事実であったので、宮廷は心配し、困惑した。頭脳明晰で、古老のスタンフォードは、新しい方針と、それから新しい名前を採用した。

王家を単なる表看板や、彼らの言う「意味のない機関」ではなくて、永久に存続する権威と見做すように、我々は、思慮のある労働者階級、労働党員、その他の者たちを鼓舞しよう

と努力しなければならない。それは、すべての階級の利益と社会的幸福に影響を及ぼす情報を歓迎している受容的な能力をもち、これらの疑問に共鳴することだけでなく、それらの解決を進めることを願っているものである。労働争議と労働紛争に関して、もちろん、私は、仲裁人の役割は、統治者が採用することができるものではないということを知っている。しかし、機会が与えられるならば、工業地帯への陛下の訪問中に、雇い主と就業者が解決しなければならない問題に対する彼の関心を示すための労働者との話し合いの中で、これらの人々は国王において、私があえて上で列挙したこれらの特性を「美德」と言ってもよろしいだろうか、その特性を認めるであろう。

国王の近くにいるある人々は、シンブルで適正に聞こえるように人々に訴えるにちがいない名前を提案した。フィッツロイ、ランカスター、プランタジネット、ヨーク、または単にイングランドが候補となった。それらすべてが、過去、または過去の紛争で際立っていた。しかし、スタンフォードは完全な名前を思いついた。ウインザー、「最も適切で、最も聞いて快く、最も経済的で、さらに最も喜びに満ち、威厳があつて、魅力的な名前である」
公式発表は、宣言や譲位と通達に満ちた、冗長で、正式な業務だが、一九一七年七月十七日、パシエンデルの殺戮に満ちた戦

鬪の直前に発表された。その時、ホーエンツォレルン家、オールデンバーグ家、ハプスブルグ家のように、英国王は一城塞のキングであった。

しかし、それがすべてではなかった。「敵国の皇帝、国王、王子たち」のものであるセントジョージ教会のガーター旗を撤去する以外に、さらに名前を変えなければならなかった。（アレクサンドラ王妃を除けば、メアリー王妃よりドイツが嫌いな人はいなかったが）テックの姓はケンブリッジになり、テック公爵がケンブリッジ侯爵に、テックのアレクサンダー公がアスローン伯爵となった。

「このように名前を変えるとは何たるナンセンスであることか！」前初代海軍省長官、バットンバーグのルイス公提督が言い放った。しかし、数日後に、侵すことのできないものは何もなく、また、栄えあるバットンバーグの名前も、ガーター旗のように消えなければならぬということを彼は知った。シャルルマーニュまでさかのぼることができる主張しているヘッセンの王朝を誇りに思う男性にとつて、それ自体「容赦がなく、不必要なこと」だが、英国海軍の長を、強制的に辞任させられることに追い打ちをかけることで、手痛い打撃となった。

「苦心した新しい名前」は、ミルフォード・ヘイヴン侯爵、メディナ伯爵かつオールダニー子爵であった。提督の妻ヴィクトリ

アは、ヴィクトリア女王の孫娘にしては、社会主義的とは言わないまでも、過激で、平等主義の見識をもつ女性だが、やはり怒りがおさまらなかつた。彼女は王女から貴族階級へ降嫁し、彼女が侍女に手紙を書いているが、「私は、醸造者、弁護士、銀行家貴族らの記憶によって不当に影響されています」

彼女の下の息子、ディッキーは、巡洋戦艦旗艦ライオン号に海軍兵学校生となつて兵役についており、その時何食わぬ顔をして、彼の母によると、すべてを「大がかりな冗談」と見做したという。

そうして、第一次世界大戦の終結が未だ見えないまま、サックスIIコーブルクIIゴータは簡潔なウインザーになり、バットンバーグはマウントバットンになり、そして、事態は二度と同じには戻らなかつた。それは確かに、批判に対して常に敏感なジョージ王には逆風であつたが、自分が国民一般から愛されていると思つていたので、世間的な中傷のためだけに、彼は苦しんだ訳ではなかつた。一九十五年の彼の乗馬事故による身体的な影響が残り、継続的な節制と相まって、飲酒を大いに楽しんだ男性にとつて、彼からかつての輝きを奪うこととなつた。そして、特に、今や完全に隔離されて暮らさなければならぬ彼の末っ子と、将来の義務に対して自信の欠如が増大するのを感じる彼の長男に関して、家族の心配があつた。

「一九十七年は、幸せでも、満足なものでもなかつた」とジョージは最後の日に彼の日記に書いた。「私の可哀想な祖国と、

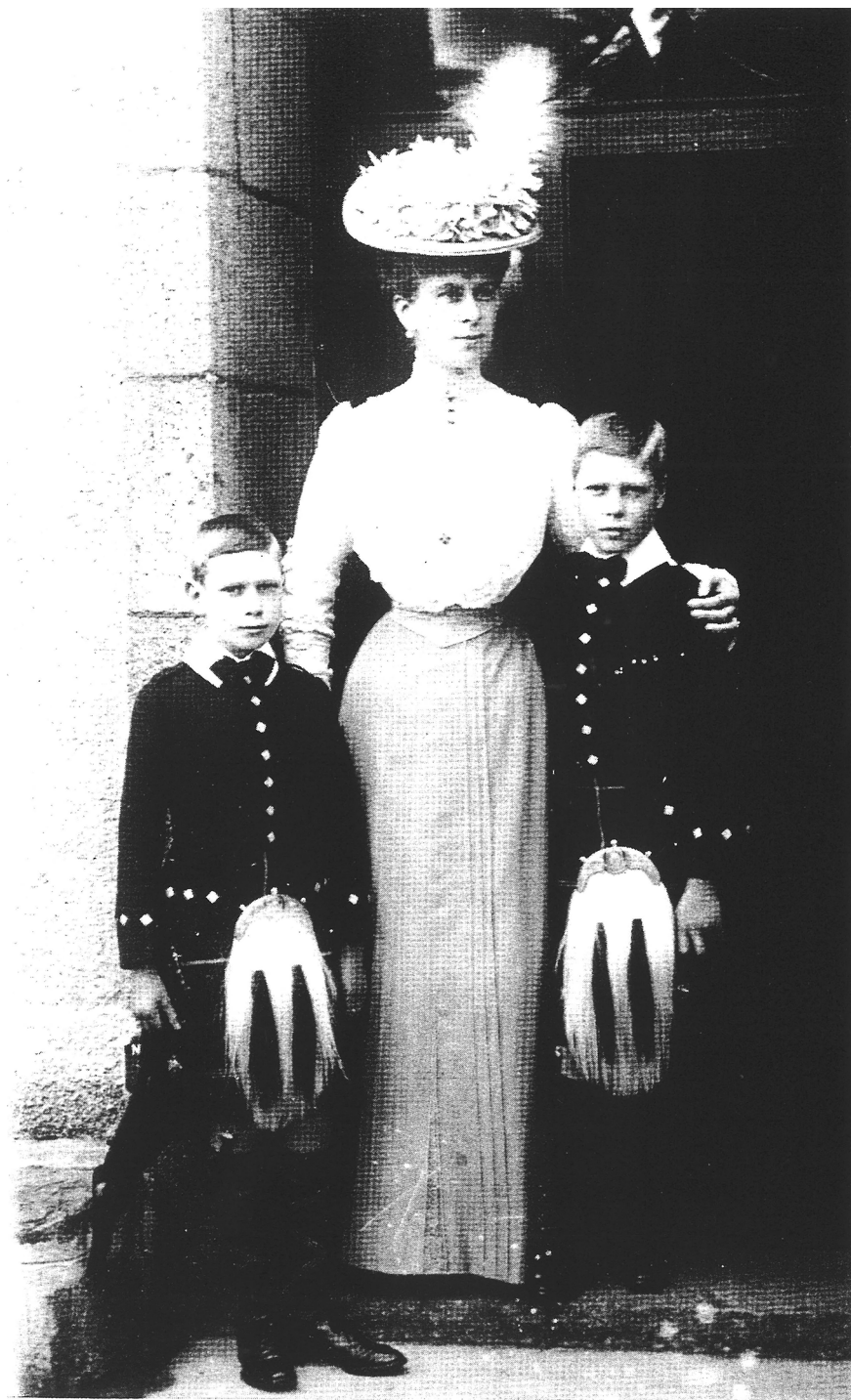
私の最愛の家族と同様、この帝国にとって一九十八年がより良い年であるように私は祈ることができるだけである」

(注)

(1) バーティイの変名

(2) 一八九十年生まれで、一九十六年に、紅海での奴隷売買と海賊行為を抑えたことで有名だった海軍士官の、四代目グランヴェル伯爵と結婚した。彼らには、息子と娘がいた。

(3) マイケル・クロード・ハミルトン・ボウズ＝ライアンは、一九二八年にエリザベス・マーガレット・ケイターと結婚して、二人の息子と双子の娘をもうけ、一九五三年五月一日六十三歳で亡くなった。



育ちざかり：母とバーティー（左）とデヴィッド



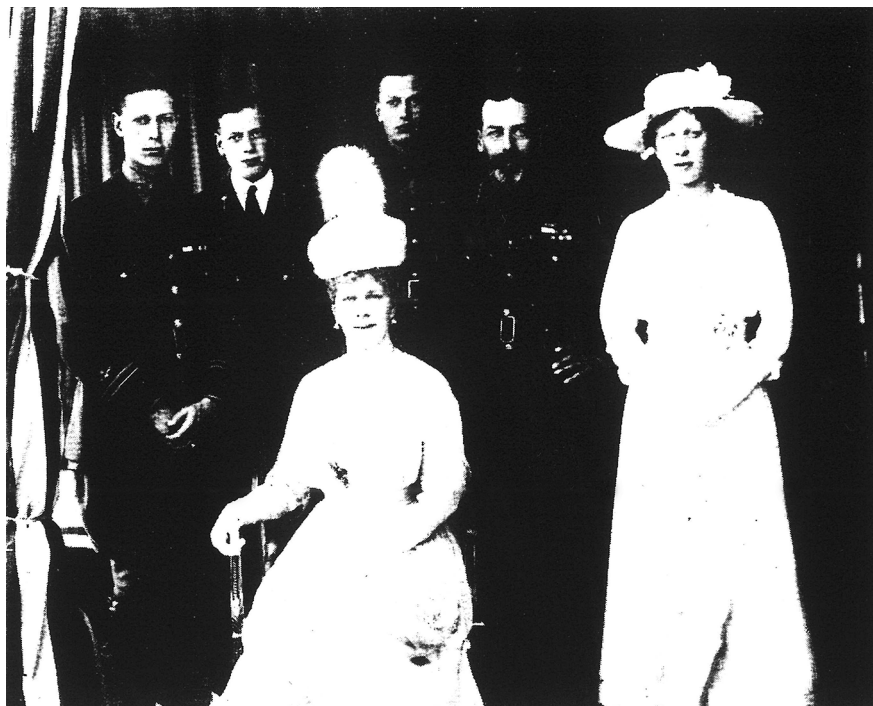
パーティーと婚約直前の
エリザベス・ボウズ＝ライアン



ジョージの未来の花嫁、
ギリシャのマリーナ公女



兄弟、姉妹とともに、母の腕に抱かれるアリス・スコット



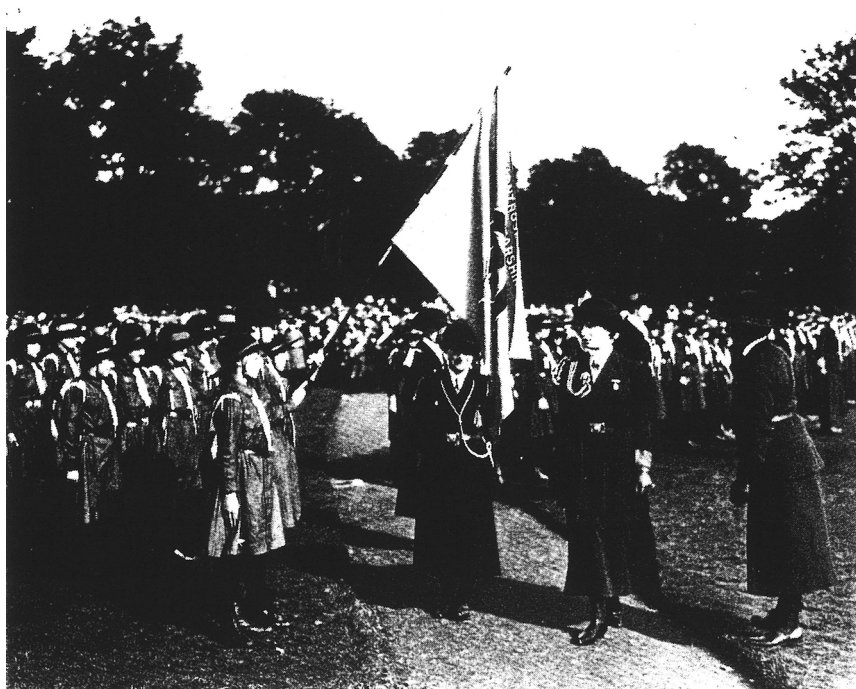
1918年の初代ウィンザー家。この名前を採用するに至らしめた戦争は終わりかけていた。両親とともに（左から右に）パーティー、ジョージ、ハリー、メアリー。



西部戦線で将軍たちとともに、デヴィッドとパーティー（左から3人目）



父の帝国で親しげな人々の中のデヴィッド



1920年、隊を視察する平時のガールガイドのメアリー



戦時の看護師のメアリー



戦時の海軍将校パーティー



飛行士のパーティー



1921年7月、大学の仲間のパイロットとパーティー



騎手のデヴィッド



海軍将校として：1921年6月、軍艦レナウン号船上のパーティー（左）、
デヴィッド、ブラウニング提督



ゴルファーのパーティー



1919年6月、ウィンストン・チャーチル
とともに、政治家のデヴィッド